火花　又吉直樹

火花大地 を 震わす和太鼓 の 律動 に 、 甲高く鋭い笛 の 音 が 重なり響い て い た 。 熱海湾 に 面し た 沿道 は 白昼 の 激しい陽射し の 名残り を 夜気 で 溶かし 、 浴衣姿 の 男女 や 家族連れ の 草履 に 踏ま せ ながら 賑わっ て い る 。 沿道 の 脇 に ある 小さな空間 に 、 裏返し に さ れ た 黄色い ピールケ ー ス が いくつ か 並べ られ 、 そこ に ベニヤ 板 を 数枚重ね た だけ の 簡易 な 舞台 の 上 で 、 僕達 は 花火大会 の 会場 を 目指し歩い て 行く人達 に 向 け て 漫才 を 披露 し て い た . 中央 の スタンド マイク は , 漫才専用 の もの で は なく 、 横 から の 音 は ほとんど 拾わ ない ため 、 僕 と 相方 の 山下 は 互いに マイク を 頬張る かの よう に 顔 を 近づけ唾 を 飛ばし合っ て い た が 、 肝心 な 客 は 立ち どまる こと なく 花火 の 観覧場所 へ と 流れ て 行っ た 。

人々 の 無数 の 微笑 み は 僕達 に 向け られ た もの で は ない 。 祭り の お 囃子 が 常軌 を 逸する ほど 激しく て , 僕達 の 声 を 正確 に 聞き取れる の は , おそらく マイク を 中心 に 半径 1 メートル くらい だろ う から , 僕達 は 最低 で も 三秒 に 1 度 の 間隔 で 面白い こと を 言い続け なけれ ば , ただ 何か を 話し て い るだけ の 二人 に なっ て しまう の だ けど 、 三秒 に 1 度 の 間隔 で 無理 に 面白い こと を 言お う と する と 、 面白く ない 人 と 思わ れる 危険性 が 高過ぎる ので 、 敢えて無謀 な 勝負 は せ ず 、 あからさま に 不本意 で ある という 表情 を 浮かべ ながら 与え られ た 持ち時間 を やり過ごそ う と し て い た 。 結果 が 芳しく なかっ た ので 、 その よう な ネタ を やっ て い た の か は あまり 正確 に 覚え て い ない 。 「 自分 が 飼っ て いる セキセイ インコ に 言わ れ たら 嫌 な 言葉 は なん や ? 」 という よう な こと を 相方 に 聞か れ 「 ちょっと ずつ でも 年金払っ とき や 」 と 最初 に 答え た 。 それ から 「 あの デッド スペース は もう あの まま や ねんな 」 , 「 折り入っ て 大事 な 話 あんねん けど 」 、 「 昨日 から 眼 を 合わせ て くれ へん けど 食べ よう と 思っ てる ? 」 、 「 悔しく ない ん か ? 」 など と 、 およそ セキセ イインコ が 言う はず の ない 言葉 を 僕 が 並べ立て 、 それ に対して 相方 が 相槌 を 打っ たり 、 意見 を 﨎 たり し て い た の だ けど , なぜか 「 悔 しく ない ん か ? 」 という 言葉 に対して だけ 相方 が 異常 に 反応 し 、 一人 で 笑い始め た 。 その 時 、 僕達 の 前 を 通り過ぎ た 人達 は 相方 の 笑い声 しか 聞こえ なかっ た はず だ が , 相方 は 声 を 出さ ず に 笑う引き笑い なので , ほとんど 僕達 は 二人 で ただ そこ に 立っ て いる だけ の 若者 だ っ た 。 相方 が 笑っ た こと が 唯一 の 救い だっ た 。 確か に 一日 の 充実感を 携え て 帰宅 し た ところ を ペット の インコ に 「 悔しく ない ん か ? 」 など と 言わ れ たら 、 少し だけ 羽 を 燃やし たく なる かも しれ ない 。 い や 、 羽 を 燃やし たら インコ が 可哀想 だ 。 むしろ 、 ライター で 自分 の あぷ 腕 を 炙っ た 方 が 火 を 恐れる動物 に 激烈 な 恐怖 を 与え られる かも しれ ない 。 火 で 自分 の 腕 を 燃やす なんて 、 鳥 から すれ ば 驚異以外 の 何 も の で も ない だろ う 。

 そんな こと を 思う と 、 僕 も 少し笑え た の だ けど 、 通行人 は 驚く ほど 僕達 に 興味 が なく 、 たまに 興味 を 示す人 も いる に はい た が , それ は 眉間 に 皺 を 寄せ ながら 僕達 に 中指 を 立て て 行く よ うな 輩 ばかり で , 頗る不愉快 だっ た 。 大勢 の 中 で の 疎外感 に 僕 は やら れ て い て 、 いま 、 飼っ て いる インコ に 、 「 悔しく ない ん か ? 」 と 言わ れ たら 、 思わず泣い て しまう の で は ない か と 思っ て い たら ma-- 僕達 の 後方 の 海 で 爆音 が 鳴り 、 山々 に 響い た 。 沿道 から 夜空 を 見上げる人達 の 顔 は 、 赤 や 青 や 緑 など 様々 な 色 に 光っ た ので 、 彼等 を 照らす本体 が 気 に なり 、 二度目 の 爆音 が 鳴っ た 時 、 思わず後ろ を 振り返る と 、 幻 の よう に 鮮やか な 花火 が 夜空 ! 面 に 咲い て 、 残滓 を 煌めか せ な が , 時間 を かけ て 消え た 自然 に 沸 き 起こっ た 歓声 が 終る の を 待た ず 、 今度 は 巨大 な 柳 の よう な 花火 が 暗闇 に 垂れ 、 細かい無数 の 火花 が 捻じれ ながら 夜 を 灯し海 に 落ち て 行く と 、 一際大きな歓声 が 上がっ た 熱海 は 山 が 海 を 囲み 、 自然 と の 距離 が 近い地形 で ある 。 そこ に 人間 が 生み出し た 物 の 中 で は 傑出 し た 壮大 さ と 美し さ を 持つ花火 で ある 。 この よう な 万事整っ た 環境 に なぜ 僕達 は 呼ば れ た の だろ う か と 、 根源的 な 疑問 が 頭 を もたげる 山々 に 反響 する 花火 の 音 に 自分 の 声 を 掻き消さ れ 、 矮小 な 自分 に 落胆 し て い た の だ けど 、 僕 が 絶望 する まで 追い詰め られ なかっ た の は自然 や 花火 に 圧倒的 な 敬意 を 抱い て い た から という 、 なんとも 平凡 な 理由 による もの だっ た 。

出典: https://www.ebookjapan.jp/ebj/314971/